

第17回オリエンテーリング
世界選手権報告書

1997年8月10日-16日
Grimstad (Norway)

日本選手団名簿	1
世界選手権への準備／遠征日程等	2
総括報告	3
女子チーム総括	4
男子チーム総括	5
トレーニングキャンプ報告	金子しのぶ	6
	安斉秀樹	7
クラシカル		
予選について	加納尚子	8
決勝観戦記	加賀屋博文	9
シヨート		
予選	福士淑子	10
予選について	利光良平	11
ファイナル	村越 真	13
リレー		
1走を走って	鹿島田浩二	14
1走を走っての感想	金並由香	16
女子リレーの記	木植早生	17
男子リレーの記	丸山哲史	18
選手を世話するオフィシャルの立場から	田島利佳	19
成績	21
A Side View of WOC	荒井正敏	28

日本選手団名簿

ジェネラルマネージャー	藤井 範久
女子コーチ	山岸 倫也
男子コーチ	村越 真
オフィシャル	安斉秀樹
オフィシャル	田島利佳

選手	木植 早生	村越 真 (コーチ兼任)
	金子 しのぶ	丸山 哲史
	福士 淑子	利光 良平
	加納 尚子	加賀屋博文
	金並 由香	鹿島田浩二

世界選手権への準備／遠征日程等

SQUADでは、世界選手権遠征にむけて様々な活動を行っている。世界選手権の準備に直接関係する準備としては以下のような行事を行ってきた。

1996年	8月	ノルウェー合宿
	10月	予備選考指定レース (東日本大会)
	11月	予備選考指定レース (西日本大会)
1997年	1月	合宿 (富士宮)
	2月	予備選考指定レース (早稲田大会)
	3月	予備選考指定レース (全日本大会)
	4月	選考会+チャリティー大会 (大島)
	5月	選考会 (赤城) 合宿 (大島)
	6月	合宿 (上総一宮)
	7月	合宿 (富士) 合宿+チャリティー大会 (八ヶ岳)

遠征日程

- 8月 3日 チーム合流
- 4-9日 トレーニングキャンプ
- 10日 開会式・モデルイベント
- 11日 クラシカル予選
- 12日 クラシカル決勝
- 13日 休養日・スペクテーターレース
- 14日 ショート予選・決勝
- 15日 休養日・スペクテーターレース
- 16日 リレー

実力を伸ばしてきたと言えるでしょう。一方女子チームについては、個人戦では予選を通過することができませんでしたが、最終日のリレーにおいて第4走者のゴールまで他チーム（アメリカ、カナダ）と競い合えたことが収穫と言えます。しかし、男女とも実力を出し切ったかと聞かれれば、"NO"と言うしかありません。この2年間スコードの強化部長をしてきましたが、選手強化の難しさを改めて感じています。

今回の日本代表チームの遠征は、7月1日に丸山、中旬に村越とオフィシャルの田島、下旬には木植と金子が渡欧し、そして8月に入り残りのメンバーが渡欧して最終的なトレーニングを行いました。トレーニングの内容は別に記載があると思いますが、日本チームとしてのトレーニングは1年前に遡ることができます。世界選手権大会では、本番の約1年前にトレーニングキャンプと呼ばれる練習会（合宿）が開催されます。これまでの世界選手権大会でも日本から数名がこの1年前のトレーニングキャンプに自主的に参加していたのですが、スコードでは96年8月にノルウェーで開催されたワールドカップ直後のトレーニングキャンプへの参加者を積極的に集めました。その結果、20数名がこのトレーニングキャンプに参加し、今年の世界選手権大会に向けての日本チームのトレーニングが開始したことになります。一般に日本選手は北欧の地形に不慣れだと言われていますが、この1年前のトレーニングキャンプに参加することによって日本でのトレーニングが非常に楽であることが分かりました。地図表現と地形とのギャップを最小限にすることができ、日本でのルートプランニングのトレーニングなどに役立たせることができました。スコードでは、すでに2年後の世界選手権大会（スコットランド）に向けての準備を始め、来年の夏もスコットランドでトレーニングキャンプを行うことを検討しています。

さて今回の世界選手権大会は、コンパクトな大会を目指していたようで、すべてのレースがグリムスタの街の近くで行われました。特にクラシックレースの会場は、日本代表チームの宿舎から車で4～5分の距離で、パブリックレース参加者の宿舎にもなっているところでした。また使用したテレインは基本的には2箇所、レースによって（予選と決勝、世界選手権大会とパブリックレースなど）地図の縮尺や使用する範囲を変えたものを作成していました。さらに今回使用されたテレインは街の近くということもあって過去にオリエンテーリング用地図が作成されており、日本チームもその地図を入手して練習に役立てることができました。またこれは、日本でワールドカップや世界選手権大会を開催する場合でも、ちゃんとしたテレインコントロールができていれば新しいテレインを開発する必要がないことを示してくれています。

最後になりましたが、今回の世界選手権大会の参加に際して、御支援、御声援を頂いた日本オリエンテーリング協会、賛助会員の皆様、さらに現地までお越し頂いて応援していただいた皆様にお礼を申し上げます。皆様、本当にありがとうございました。

ノルウェーのなかでも特にタフで、高度なナビゲーション技術を要求されるGrimstad周辺のトレイン。コーチの目標は各選手のレベルを“競い合える”レベルにまで高めることである。あえてチームとしての数値目標は設定しなかったが、日本代表に選ばれた5人の選手がそれぞれ自分の課題を克服することを目標とし、それが達成されたときにチームとしての目標（たとえばリレーでの好成績）が達成されると私は考えていた。

女子の課題はまずノルウェーのトレインに慣れ、日本でしているのと同じプランと手続きが実践できるようになること、そして難題のロングレグの克服である。長いナビゲーションの課題が課せられるクラシカルは日本の女子にとって最も苦手な種目である。ショートはレースが荒れてくれば決勝進出の可能性があるし、リレーでは4走がゴールするまで他のチームと競い合える順位をキープすることが潜在的な目標であった。

結果はクラシカルとショートが全員予選落ち、リレーは25チーム中21位（完走22チーム）であった。リレーではウイニングタイムが伸びたことで補正すれば、コーチの予測タイムから15分程度しか遅れておらず、19位まで数分と健闘できたが、ショートを含め個人競技では全体的なレベルアップが必要だろう。

以下、5人へのメッセージに紙面を割きたい。

富士は地図読みが苦手だと思い込んでいたために地図と地形に対応できずにいたが、クラシカルのメンバーからはずして調整の期間を長くとり、自分のオリエンテーリングのスタイルをじっくりと再確認したのがよかったと思う。リレー4走でのカナダ、USAとの僅差のレースは十分に評価できる。

金並は初めてのWOCで十分なポテンシャルを見せてくれた。リレー1走での成功は十分な準備はもちろんのことWOCの期間を通じて精神的に“競技”から逃げなかったご褒美だろう。しかし、今回のWOCは結果を出すよりも世界で戦うための課題を明確にする場である。ショート予選での失敗から得たことを忘れずに。

3回目の出場となる金子は準備という点では今回は非常に充実していたと思う。走るスピードも地図読みの技術もバランスがとれていた。しかし、適度に何でもこなせる器用さが甘えを生んでしまい、今一つ結果に結びつかなかったのが残念だ。

加納は5人の中では最も海外遠征の経験が浅かったが、WOCの期間を通じて1日ごとに北欧でのオリエンテーリングの手続きが確実になっていった。今回は彼女は体調が悪く、もう少し準備ができる状態であつたらと悔やまれる。

前回ショートで決勝に進出した木植にはみんなの期待がかかっていた。春先に体調を崩していたのがうそのように元気になり、5人の選手の中では常にベストの結果を出し続けてくれたが、時々起こす信じられないようなミスが彼女を決勝へのボーダーラインから遠ざけた。

そろそろ女子も男子のように中堅国の仲間入りをめざした本格的なレベルアップを試みる時期だと実感した。女子選手みんながその気になるよう、盛り立てていきたい。ご支援をお願いする。

どんぞこであった80年代後半の世界選手権から10年、ようやく私たちは世界の舞台で競い合うアスリートの集団としてはい上がってきた。ショートの結果が何よりそれをよく表している。各国4人づつが、4つの予選に別れて出場するショートでの日本の平均順位は17位台である。全員が予選落ちであったとしても、17位は日本全体のレベルの高さを示すものだ。実際に、予選を通過した村越以外の3人ともが、惜しいと思えるレベルの結果を残したのである。

この結果に比較すれば、リレーの結果は最終的には今一步だった。最終成績の19位は、参加チーム数比では過去最高の前回は更に上回っているが、より上位にいておかしくない4チームが失格になっていることを考えれば、手放して評価できる結果ではない。それでもここ10年で、集団の中で競り合える時間は、確実に延びている。4走での順位低下を当たり前のことではなく、悔しいこととして捉えることができるようになった。

昨年のノルウェー遠征では、村越以外（鹿島田は遠征せず）は、ノルウェーのレースにとても対応しているとは言えなかった。それから考えれば、今回の結果は、選手とチームのここ1年の努力の証である。ノルウェーの地図を使つての机上でのルートプランニング練習や、ノルウェーでの反省を念頭においた準備が、とりわけ有用だったようである。結果は適切な努力の上にはしか生まれえないものなのである。

反省点と今後の展望を最後にまとめておこう。

第一に選考会の結果である。2回行われた選考会でコンスタントに実力を発揮できた選手は皆無に等しかった。目標とするレースへの準備や集中という点ではチーム全体としてはまだまだのレベルにある。各選手が選考会で最大限のパフォーマンスを出すことがチーム全体のレベルを高めることにつながるはずである。今や予選通過直前までチーム全体のレベルは上がっている。しかしあとほんの1分を縮めるためには、これまでに劣らない努力が必要なのである。

第二には、選手の資質を高め、開花させる活動がチームとしてまだ十分ではない点である。男子コーチとして機会あるごとに、選手の目指すべき方向を指摘しているが、その実現の多くは選手個人の努力に任されている。更に一步上を目指すとすれば、コーチングのレベル向上も大きな鍵となるだろう。

今回も経済的にも、精神的にも多大な援助を日本のみならず韓国のオリエンティアの方から受けたことは、私たちの大きな励みになった。今回の世界選手権にワクワクしてもらうことが、その幾許かのお返しになったと思う。世界のオリエンテーリングシーンでの夢をとおして、この関係をより強固なものにしていくこともまた、チームと日本のオリエンテーリング界にとって重要なことだと思う。

トレーニングキャンプ報告

金子しのぶ (選手)

世界選手権ウィークに入る前の一週間、現地で、テラインの対応、および調整を目的とした、トレーニングキャンプを行いました。本体は8/3～8/9の一週間でしたが、村越、丸山、金並、田島、金子の5名は、1日はやく、8/2から入りました。練習のながれとしては、前半は、地図と現地との対応。後半はタイムレースなどで、レースへむけての調整という感じでした。

- 8/2 午後 FEVIK MARKA
- 8/3 午前 LOEHIA 午後 FEVIK MARKA (本体合流)
- 8/4 午前 LOEHIA (前半組休み) 午後 MOEN
- 8/5 午前 TVEITEN (ポイント、リレー練習)
- 8/6 休養日 (一部MOENで練習)
- 8/7 午前 SKJULESTAD (クラシカルタイムレース)
- 8/8 男子 MOEN (ショートタイムレース) 女子 LOEHIA
- 8/9 移動日 一部トリムテックスオープンレースに参加
(丸山、福土、木植、加納)

FEVIK MARKA, MOEN, TVEITEN 1/10,000 (ショート用テレイン)
LOEHIA, SKJULESTAD 1/15,000 (クラシカル用テレイン)

実際は、選手の体調や目的に合わせて、もっと細かいバリエーションがありました。選手としては、やり易いのですが、オフィシャル陣は、ほとんどOFFがなく、大変だったと思います。

私自身は、捻挫をして8/7は走っていないので、この一週間の走行距離は、26.0kmになります。普段の走行距離からすると、かなり少なめですが、ほとんどオリエンテーリングであることを考えれば、負荷はもっと大きいはずなので、レース前の調整としては、ちょうど良い量でした。また、この量で、テレインに対してあまり不安を持たずにWOCを向かえられたのは、一年前に行われたトレーニングキャンプに参加していたことが、とても大きいと思います。

昨年の夏、25名以上の日本人選手が、SQUADのアレンジしたトレーニングキャンプに参加していました。ノルウェーと、日本とでは、かなり地形が違います。日本でどんなにルートプランの練習をしても、描いている景色が違えば、結局オリエンテーリングになりません。最終的には、現地での練習で、地図との対応をしていく必要があります。私もこの時、はじめてノルウェーの森に入ったのですが、この時に細かい地形と地図の対応

をしておいたのが、その後の準備に非常に役立ちました。もしこの準備がなかったら、ノルウェーに行く直前まで、もしくは、ノルウェーに着いてもまだ、トレインに対する不安をかかえたままだったと思います。

次回のWOCスコットランドで行われますが、3種類の異なったタイプのトレインが用意されるとのことです。次回もぜひ1年前のトレーニングキャンプを用意して頂きたいと思います。

最後に、いろいろとアレンジを下さった、SQUAD関係者の方々、応援して下さいました。そして、オフィシャルの方々、どうもありがとうございました。

トレーニングキャンプ報告

安齋秀樹（オフィシャル）

1. トレーニング期間

トレーニング期間と内容については金子しのぶの報告を参照いただきたい。

2. トレーニング内容

1:15000（クラシック用）と1:10000（ショート用）の両方の縮尺の地図がトレコースとして準備されていた。もちろん本番に合わせて、1:15000は急斜面からなる丘の上の微地形、湿地のコンビネーションのあるノルウェーらしい美しい森で、ルートのバリエーションのあるロングレグを中心としたクラシックの練習を、1:10000は比高が少なくヤブいテクニカルな森でショートの練習を行った。トレーニングの参加は各個人に任せられ、特に気温が高かったこともあって、休養するなら森へもでかけずに宿舎に残ることを薦められた。

レース1週間前にはレース形式でトレーニングを行った。7日にはクラシック（M9km, W5.5km）、8日にはショート（M4km, W3km）でいずれもオーガナイザーが用意したコースを利用、又は参考にしてコースを組んだ。

ノルウェー南部のこの時期にしては珍しく雨が降らず、予定を順調にこなせたのだが、連日30度にまで気温が上がる異常気象のため、トレーニングは短時間でやることを心掛けた。

3. 備品等

今回チームとしてレンタカーを3台借りた。トレーニングには出来るだけ3台とも使って、トレーニングが終わった人から順次宿舎へ帰ることにした。いずれのトレインも車で15～30分程度で遠くなく、非常に恵まれた環境でトレーニングが行えたといえる。

冷却剤、テーピング、湿布等も十二分に準備した選手もいて、足りなくなることはなかった。

宿舎のホテルの厚意で氷も提供してもらえた。これは非常にありがたかった。洗濯や食事の面でもかなり優遇してもらえた。なお、このホテルは昨年夏のノルウェー合宿の時にもお世話になったホテルである。

クラシカル予選について

加納 尚子

今回初めて世界選手権に出場できることとなった。海外遠征は初めてではなく、北欧のテラインも何回かは走っていた。しかし、自分でも予期しなかった体調の急激な悪化！トレーニングキャンプのメニューでも、こなせたのは半分程度で、準備はぼっちりとはいえなかった。

それでもクラシカル予選の当日までにはなんとか走れるところまでごまかした。レース自体に対する不安はなかったので、当日はいつもと変わらず平常心でスタートできたと思う。

1はすぐ近く、直進でOK。2はややロングレグで、オープンの湿地がかなり広がり、目に見える地形に惑わされて45度パラレルをおこしかける。ずれたところをコンパスに引っぱってもらったような形でリロケート。何とかプラン通りのCPIにたどり着き、そこからアタックはOK。しかし次の3、4とアタックで失敗して、コントロールの円の中で少々さまよう。

気を取り直して道走りの5。アタックはやや距離感が合わず不安になるが、「こういうときはそのまま進む！」で、やっぱりあった。このへんからやっとスピード感がついてくる。(本来なら最初からこの調子でいきたかったが)

6以降はコンピのようにショートレグが最後まで続く。⑨までとって道走りにはいると、あとは会場付近に4コントロールだ。なんだか気を焦らすようなかんじやなあ、会場のアナウンスもがらがん聞こえてくるし。

と向こうから役員らしき人が二人連れでこっちに来る。手にはパンチ台とフラッグが！え、もう撤収か？あまりにマイペースで走りすぎたのか？そんなあほな。

ちょっと止まって番号を見る。どうやらわたしのコースではないので一安心して7へ。8へ行く途中さっきの役員のうち一人が追っかけてきて、むこうもこっちの持っているMAPを確認させてくれ、という。なんだかしらんが人騒がせだ。

後は順調にとってゴールへ。遙かにゴールの櫓がみえた。そこまでがやたらと長い。あまりにも観客が多いのにびっくりする。なんかはずかしいのと情けないのとで、すごく走りづらかった。みんなわたしを見ないでくれ、ってかんじでゴールをくぐった。

成績としては106人中で下から数えて3番目。今の自分ではこんなものだろう。私より遅いやつがいるほうが驚きだ。

結局これが私の唯一のWOCのレースだった。体調のせいもあって、自分の目標をかなり下げざるを得なかったこともあるが、そればかり気になってしまって、攻めに行くレー

スができなかったのがとても残念だ。次の機会というものがあるのなら、今度こそ！という気持ちでいっぱいだ。そのために準備しなければいけないこと、積み上げていかなければならないことは多くある。それを悔しさとともに再確認させてくれたこと、勉強になった、と思う。最後に、迷惑かけまくったこんな私をいろいろと助けて下さったコーチ、チームメイト、オフィシャルの方々、応援して下さいました皆様、心から感謝しています。どうもありがとうございました。

クラシック決勝観戦記

加賀屋博文

会場に到着したとき、既にゴールレーンは数千もの観客で埋め尽くされていた。昨日の予選の時とは明らかに違う、熱気を帯びた雰囲気そこに漂っていた。それにしても、さすがは本場Norwayの世界選手権である。観客だけでこれだけの人数が集まるとは。これだけの舞台を観客の一人としてしか眺められない自分に対し、やはりどうしようもない悔しさを感じてしまう。

91年以降、個人戦はクラシックとショートの2本となり、それぞれに世界選手権者が誕生することとなった。ショートにはゲームを攻略するような喜びがあるのに対し、クラシックにはオリエンテーリングのロマンがある。だからこそクラシック決勝を走ることにはこれほど憧憬し、その勝者こそが真の世界一、そうずっと思っている。

その舞台に、日本からは唯一村越真が出演している。タフなテレイン、強烈な日差しの中、中間速報のボードは彼の確実なレース内容を伝えている。トップスタートからは既に2時間以上過ぎている。だが、まだ誰も姿を見せない。ウイニングは伸びそうだ。ようやく男子選手が帰って来て、まもなく彼が現われる時間になった。ラストコントロールよりもずっと前で日本男子選手たちは彼のゴールを待ちわびている。早生さんはいつものようにカメラを構えている。彼は今、どんな思いでテレインを駆けているのだろうか。

彼にとっては89年以来実に8年振りとなるクラシック決勝である。一時はクラシックを走ることを諦めたかのようにも思われた。91年、93年と予選無しで決勝を走れる機会がありながら、彼は鹿島田等に少ない日本の枠を譲っている。

彼の昔の文章に、彼が「クラシックはもう自分の目標ではない」と他国の選手に答えたとき、その選手から「出ないの？俺はそうは思わないよ」そういったやりとりが書かれていたことを何故かはっきりと覚えている。だが、そういうやりとりをあえて記したところに当時の彼の割り切れない思いが残されていると感じた。そして、95年のドイツからクラシックにも予選が設けられると知り、それから彼のクラシックへの思いが復活したのではなかったのだろうか。直前の静岡でのロングOで2時間38分を走りきって優勝した彼には「自分はまだまだクラシックで戦える」そんな自信に満ちあふれていた。

残念ながらドイツではポーターに2分足りず決勝進出できなかったが、その情熱は衰えることがなかった。1年前のワールドカップで手応えを掴み、そして今夏北欧入りしてからは好調を持続、きっちりと予選を通過し、そして今、まさにNorwayの厳しいレースを終えようとしている。

来た、Number011、しっかりとした足取りで彼がゴールレーンを駆け抜ける。これほどまでに彼の走りが大きく見えたことはなかった。2時間9分2秒でフィニッシュ。

ゴール後、さぞ疲労困憊しているだろうとの予想を裏切り、彼は爽やかな笑顔で淡々とレースを振りかえっていた。その表情には満足感というよりはむしろ、一つの達成感と、まだやれるぞといった充実感がみなぎっていた。

さて、男子選手権は42番スタートのKjetil Bjoerlo(NOR)が103分でゴールしてから、しばらくそのタイムを上回る選手が現われなかった。あとは途中で彼を上回るタイムで通過しているPetter Thoresen(NOR)やMr.Orienteering Jorgen Martensson(SWE)ら、ラスト5人のトップエリートのタイム次第である。次に帰ってくるはずのJanne Salmi(FIN) (前回2位) がなかなか姿を現わさない。つかの間静寂、しかしそれは嵐の前の静けさだったのだ。ようやく105分でJanne Salmiが姿を見せた、と思ったら舞台は一気にクライマックスを迎えていた。続けてスーパー走力男Carsten Jorgensen(DEN) (前回3位)、すぐあとにJorgen、と思ったらもうその後ろに2分後スタートのPetterがいる。Norwayの国旗を手に、勝利を確信してのウィニングランだ。女子選手権はこれも地元のHanneStaff(NOR)が73分で走りきり、Norwayがアベック優勝を果たした。この2人は世界チャンピオンを日本へ呼ぼうプロジェクトにより、年末にも日本を訪れる予定だ。

レースは終わった。今回も自分は決勝を走ることができなかったが、やはり走らないままで終わりたいはない。村越さんだって戻ってくるのに8年かかった道のりだ、自分も努力を積み重ねて必ずや決勝の舞台に立ってみたい。

ショート予選

福士淑子

世界選手権が始まって5日目。私にとっては今回初レースとなるショート予選の日だ。トレキャン中にクラシカルレースに出場しないことが決まってからは個別スケジュールで調整をし、10000分の1の地図に絞ってのトレーニングやショートレースで、表記されている地形のイメージや感覚をつかむことに時間をかけてきた。自分なりに調子が上がってきているのはわかりつつも、当日の朝はどことなく落ち着かず、久々の本番の雰囲気ちょっと戸惑う。でもいつものレース前の緊張感であるのは確か。スタート前の1分間がやけに短く感じ、ちょっとあせるが、1ポが分かり易いショートレックだったこともあ

り、落ち着いてレースを始めることができた。

「ベアリングでしっかり方向をとること、そして地形のイメージを確認すること」。レース中、他のランナーに引きづられてしまうとそんな基本的なこともおろそかになりがちで、何度も何度も自分に言い聞かせた。コースは超ショートレッグの後、500m程度のロングレッグ、中盤はミドルで後半ロング、ロングの終盤ショート。10000分の1の地図上では500mがとても長いレッグに感じられ、精神的によろしくない。そしてこういう時に他国の選手との一番の実力差は走力ではなくナビゲーション能力であることを思い知らされる。結局、レース終盤でイメージが漠然としたままアタック（禁じ手なのに）したところで数分ミスをして良い所なしではあったが、トレーニング中は現地との対応が上手くとれなくなると怖くて前に進めなくなることすらあったので、臆病にならずに最後まで走りきれたことはまずまずの出来であった。

ショートレッグでは周りの選手と併走しても数秒差で走れて気後れすることもないが、トップが4分を超える（ロング）レッグでは150%以上、同じ組のレッグ15位の選手との比較でも130%増しのタイムになってしまう。地形を単純化できるレッグなら自信を持ってスピードも上がるが、少し長目の曖昧なレッグになるとノルウェーの林を自由自在に走る余裕がない上に、連続的にナビゲーションする力が未熟なために端的にタイム差がでてしまうのだ。

結果はボーダーから8分。毎回埋まらない差であるが、ミスをひいてもあと3～4分というのが現実なのである。オリエンテーリングの部分でののろさはまだまだ課題ありといったところ。例えば各レッグで走り出すまでにかかる時間の長いこと！地形と対応させるために立ち止まる回数の多いこと！オリエンテーリングの一つ一つの操作を取り上げたら削れるであろう時間はたくさんある。それを日本でのラフな地形でのOLの中で如何に意識して走るか、自分に課すかが問題なのだ。毎回の宿題、課題を少しでも自分の、チームの力にして、よりスピーディーなOLを目指して今後も挑んでいきたいと思う。

遠征を通して支えてくれたコーチ、チームの仲間、そして賛助して下さった多くの方に感謝しています。いつもいつもたくさんの日本からの応援、本当にどうもありがとうございました。

ショートディスタンス予選について

利光 良平

—遠征前—

「予選通過」。WOCの目標として、多くの選手から挙がる言葉である。しかし私にとって、WOCは見るのも走るのも初めてで、「予選通過」という目標は、言葉で言ったり、文章で書いたりする事はできても、正直なところ、なかなか実感できるものではな

かった。分かっていたことは、過去に日本人では村越、鹿島田のレベルでポーター付近の成績を取ったという事だった。だから「予選通過」という目標を「村越・鹿島田を越える」と置き換えたほうが、私には実感しやすかった。

ークラシック予選での教訓ー

ショート3日前のクラシックの予選で、私は地形を読み切らないうちに行動し、いくつもの不用意なミスを重ねていったことから、ショートのレースにおいては次のような目標を立てて望むこととした。

#地形を読み切り、プランを十分確定させてから進む。

(あやふやなうちに走り始めない)

#コンパスの差す方向をしっかりと見定めてから進む

スピードを上げてタイムアップするよりも、ロスを減らしてタイムセーブする事を考えた。

前日の休養日の午前中には宿舎近くのモデルコースに入って、上記のことを体に覚え込ませるよう丁寧な練習を行った。コンパスを見て正置をし、地図を良く読んで、ルートプランを行い、出だしの方向を見て納得した上で進む、という動作を何回も繰り返した。

ーレース前ー

食事や装備の準備は、予選だけでなく、午後の決勝レースの分もぬかりなく行った。決勝に進むのが当然のような顔をしてランチパックを作ったりした。しかし、レース直前には結果に関する事は考えなかった。ウォーミングアップを十分にし、前日のモデルでのイメージを思い出す事に集中していて、レース開始直後のナビゲーションをいかにうまくやるかを考えていた。

ーレース中ー

同時スタートの選手が速いスピードで飛び出していくのに惑わされず、冷静に1番までのルートをよく考える。道を進み、北側に伐採があるところからピークをつないで行くつもりだったが、道の様子が変(伐採で分かりにくくなっていた)で北へ流されて行く。曖昧な点でリロケートするのはまずいと思い、北側の石塁を確認してアタックプランを立て直す。40秒ほどのロスだったと思うが、1番付近にくと、同時スタートの選手がまだうろうろしている。2番は地形が細かくロスをするると大きそうなレグである。当初のプランではレグライン上のピーク群をつないで行くつもりだったが、地形と藪に流され、東側のオープン湿地よりも一段高いところを進む。1分ほど現在地に確証が持てず、方向だけ維持して走る状態が続く。プランから外れて進んでいたのでペースをいまいち上げられない。やっではいけないと思いつつも、このようなラフなオリエンテーリングをしてしまうところにまだまだ私の甘さがある。やがてその方向にあるオープン湿地を確認し、リロケートに成功する。アタックポイントをオープンの湿地の縁に置き、確実にアタック体制

に入ったつもりだが、またしても東に少しエラーし30秒程のロスをする。今度は地形の流れから、ずれるとすれば東側だとの認識を持って入って行ったので傷口を広げずに済んだが、少しもたついてしまう。3-8のショートレッグ群は、立ち止まってプランをしっかり立ててから進んだのでエラーはないが、保険としての地図読み時間が外国選手との差になっている。8からは線状特徴物をつないで行けるので、ニードルの向きに注意しながら、ペースを少し上げる。9-10で200m遠回りの安全ルートを通ったが、ゆっくりでも直進で行ったほうが30秒は速かったと思う。

ーレース後ー

自分自身のレースの出来としては65点位だろうか。ポーターから5分程度空けられた位の感覚であった。しかし、ゴール後すぐに、「ポーターくらいだ」との事をいわれ、少しびっくりする。スタート時刻が早い方だったので、最終結果はまだ分からない。とにかくも、来るべき午後のレースに備え、ダウンジョグを行って、決勝用のウェア、シューズなどを準備しながら、バナナを食べたりしていた。しかし1分半の差でそれらの準備は役に立たずに終わった。

今回、村越は10位で予選通過したが、鹿島田は僅か14秒、利光は1分39秒、丸山は4分14秒の差で不通過となった。今回決勝進出者は1名だけだったが、ポーター直下に日本人がこれほど固まったのは初めてではないだろうか。もし2-3名でも進出していれば、日本は名だたる上位中堅国と肩を並べることになっていた。

1年前のGoteborgでのワールドカップショートでは、私はAファイナルへ8分もの開きがあった。その後Modum O-campやGrimstadでのトレーニングキャンプ、日本国内でのノルウェーの地図を使った地図読み練習、大会直前の現地でのキャンプを通じ、少しずつスキルアップしていくことができた。そして今回Aファイナルのカベに手が届くところまでやってきた。しかしカベはまだ越えていない。次にはカベの向こう側の世界を見に行こう。(でもその前に日本の静岡のカベを越えなければ....)

ショートファイナル

村越 真

早いうちに予選通過を確信できた私は、ゆっくりと午後の決勝の準備を始めることができた。午後の決勝スタートは予選ゴールから歩いていける距離にあるので、予選と決勝の間をゆっくり過ごしていたかった私は、予選ゴールの木陰に残ることにした。観客が去り、チームオフィシャルや選手も大方バスで宿舍に引き上げてしまった予選ゴールでは、翌日のパブリックレースの運営準備が始まっていた。フラッグやバンチ台を運ぶトリム姿の役員、レーンの杭を打ちつける槌の音が聞こえる。のどかな雰囲気は漂い、全てが終

わってしまったかのような錯覚に陥る。しかし、本当の闘いはこれからなのだ。

ショートでは、決勝のスタートは予選で遅かった順である。13時に発表になった決勝のスタートリストによれば、私のスタート順は22番で、16時13分である。決めたとおり、15時に歩いて決勝スタートに移動する。涼しげな木陰を選んでレースの準備を始める。隣ではミスター・オリエンテーリングことスウェーデンのヨルゲン・モルテンソンが8番のゼッケンをつけている。2年前のバンケットで、彼は夫人に私を紹介する時に、

「We have been competing together for many years(私たちは、ずっと長い間一緒に競技を続けてきたんだよ)」世界チャンピオンに比較すれば、自分なんてとるに足らない存在だと無意識のうちに思っていた私は、この言葉に随分と勇気づけられた。彼も私も世界選手権に目標を置く同じエリートアスリートなのだ。そして今それが現実のものとなった。

昼にマッサージをしてもらった身体は、思ったよりも軽い。それにたったの4KMと思うと、クラシックの決勝の前のような緊張感もない。最後まで集中して走りきることができらるだろう。

コースは予選のトレインの一部の、若干藪の多く走りにくい部分に設定されている。レグも長めで、プランやチョイスの余地のあるコースだ。結果からみれば、もう少し巡行スピードを上げて走ることができたかもしれないが、予選に比べればより積極的なレースができた。メリハリのあるレース運びができたというべきだろう。

結果は45位。さすがにショートでは1分で5位は順位があがる。犯したミスから考えれば、自分のベストの39位や30位はそれほど遠いものではない。もちろんそれを実現するためには多大な努力が必要である。それにレース内容の分析からは、決勝でどう闘うというビジョンがなかったことが一目瞭然である。今回は、決勝での闘いを現実的な目標として努力できそうである。そして、ゴールレーンでの予選とは比較にならない声援の中で走れることが自分を動機づけし続けてくれるだろう。

リレー1走を走って

鹿島田浩二

村越さんから、鹿島田-村越-加賀屋-丸山のオーダーが提案されたのはリレーの前日の日である。僕の1走は出発前からほのめかされていたが、こちらに来て村越さんの方が明らかに調子良く、実は2走を覚悟していた。だから、このオーダーを聞いた時はとても嬉しかった。同時に初めてWMで1走を走るという大役に、急に不安を感じ、背筋がぞつとした。

スタートは10時45分と遅く、1走にしてはゆったりした朝を迎えられた。昨日の緊張感とは打って変わり、自分がこれから走ることが信じられないほどリラックスしてい

た。緊張の糸はスタート枠に入ったときに程よく張り詰めた。(僕より背の低いやつはウォーレンくらいだな、なんで北欧人はこんなにでかいんだろう)(世界のエリートはみんなサムコンパスを使っていると思ったけど、結構プレートタイプの奴もいるなあ)そんなことを考えていた。

スタートの合図と同時に、地図をとってまず三角を探す。1へのルートを見る。そうこうしているうちにいつのまにか集団の後ろを走っていた。せっせとついていく。山に入つて道をつないでいるうちに集団はばらけて行く。村越さんの1走体験記を何度も読んでいたせいだろうか、その光景はまるで見たことのあるかのようだった。1、2と用心しながら集団を選んでいく。3ではオープンと藪のいやらしい地形の中、4つのコントロールを巡って焦るランナーが錯綜していた。僕も近接に引っ掛かり20秒のロス、少しずつ遠のいていた集団の先頭をそれ以来見ることはなかった。その時点で周りにいたのはITA、CZE、GBRそしてSUI。5ヶ国がここから8番まで見え隠れする。そして9への途中やぶで引っかかって遅れたのをきっかけに集団は見えなくなっていった。時計を見る。30分、まあここまで集団で走れば合格だろう。よし、ここからは自分でペースを落とさずに集団からの脱落者を捕まえてやろう。それがもう一つの1走の課題。

9、10、11、12と一人で淡々とこなす。12の脱出でNORのホバートを見る。あれ、なんでだろう?あまりに意外な出来事に(2走でアップでもしてるのかな)なんてとんちんかんことを考えた。13はビジュアル。ここでもう45分かかっている。80分はかかりそうだ。つらいなあ。14へは抜かれたFRA、SLOにつられてミスルート、さらに15もアタックミスで合計2分のミスか。このミスが今思うと一番の反省点である。16からはどこからか出てきた、AUS、AUTそしてFRAの4人で走る。FRAとAUTは下手糞で使い物にならない。AUSのウォーレンはさすがベテラン。いやらしいコンピの連続をウォーレンとGIVE&TAKE、いや競り合いながら進む。体力の消耗とともに集中力が薄れ、ミスを防ぐのが精いっぱい。やぶの中で速く走れない自分にいらいらする。しかしがまんのOLを続けるうちに周りにいた集団の気配はなくなり、終盤に向かうときには一人で走っていた。最後の難しいコントロールでロンゲのRUSを抜き、ラスコンへのアタックでのっぼのGERを抜いて、長い長い初めての1走が終わった。

1走16位、トップと14分半、2位と10分。後半直後のミスを最小限に抑えていれば、一度脱落した2分前の集団(NOR、CZE、GBR、NZL)に追いついたかもしれない。しかし、タフなコースで初めてにしては合格点だと自分では思う。世界選手権の1走という至高の経験を味わえた自分は本当の幸せ者だと思ってしまう。おまけにチームは目標の18位に迫る19位。まあいろんな波乱があったけど、まずまずの結果だと思う。

99年のスコットランドでは10番台のゼッケンに見合うチームをつくろうじゃないか!

昨年の遠征の2回のリレーで1走を走っていたということもあり、今回リレーを走るのなら1走だろうと私個人としてはずっと思っていました。昨年のリレー1走のノルウェーでの成績は全く駄目でしたが、その後に行ったスイスでそこそこの走りができたことが今回の自分にとっての一つの安心というか落ち着くための材料となってくれたように思います。

94年から今年まで毎年ノルウェーの森を走ってきました。そのなかから考えた今回の世界選手権での目標は「やれることをきちんとやる」というものでした。大きくミスをした時の原因はいつもなんらかの基本的な手続きを怠ったというところにあったからです。方向をきちんと確かめなかった、地図を慌てて適当によみ、訳が分からないままに走り出した、などあまりに基本的なレベルでの失敗を繰り返していました。

クラシカルレース中に自分の走りのもたつきを感じつつも「このペースでやれば1走で確実にこえてこれるだろう」と考えていました。ショートでは自分の次へのステップとして走らせてもらい見事に失敗してしまいましたが、クラシカルでの実感もあり不安はほとんどといってよいほどないまま1走としての準備ができました。

当日は霧がかかっていてずいぶん寒い朝でした。10時のスタート。10分ほどのアップをして5分前に枠の中へ進みました。世界選手権は始めてでしたがワールドカップには何回か参加していたおかげでそれほど緊張はしてなかったです。むしろわくわくしていました。自分の役目は幾つかの国と争ってレースが展開できるような順位で帰ってくることで、そのためには私は自分のできることをきちんとすればよいのだ、と何度も言い聞かせながら地図の前に立ちました。

スタートフラッグからの周りの選手の動きを見て「これなら何人かとはからんでいると思ひ、あわてずに1番へと走り出しました。2度ほどコントロールのまわりでうろついてしまったところもありましたが、とにかく道でつなげるところは道を使って守って守って走りまわりました。毎月距離だけは走っておいたことが読図の弱さをカバーしたのだと思います。予定したよりも時間がかかり少々

不安でしたが、途中の山の中で1走トップのインタビューがきこえ、そこでウィニングがのびた事が分かりあわてずにいけました。トップと15分の後れでつなぐことが目標で、だいたいそのくらいのタイムでゴールして次の走者につなぎ私のレースは終わりでした。まだまだ速くなるためにできることがたくさんあると今回の大会に参加して思いました。この気持ちを持続させ、次の世界選手権に向けての準備をしていきたいと思ひます。援助・応援して下さったかたがた本当にありがとうございました。

一走金並さん。3. 9 KM、のほり195mトップ30分予定のコース。倫也コーチから、トップより15分遅れを目標にと。すでに2週間になる捻挫と二日程風邪をひいているので苦しい思いだったでしょう。スタート直前見送りに行くと、コーチやメンバーに囲まれています。よく出だしが肝心というけれど、人一倍責任感のある金並さんなので、「むりしないで何かあったらやめて帰って来てね。はいつくばってもゴールするなんて思わないで。」と言うと、「そんなわけにはいかないです。はってでもタッチします。」と言うので、心配ながらもやるしかないのか、大役だなー、と思いつつ任せたという気持ちでした。

スタートの合図でいよいよ開始。私はスタートしてからの誘導でしばらく進んだ森へ入るすぐ直前に応援していたのですが、集団の後ろから地図を読みながらマイペースで走っているところに「頑張って！マイペースでね。」と声をかけると、なんと「ハイッ。」と言うそぶりで首をうなずかせ通り過ぎていきました。

トップで戻って来たのはやはり北欧勢。予定より4分かかってます。続いてタッチしていき、そして想定タイムとほぼ同じ、力走の姿が見えました。体調からすると、とても息づかいが辛かった様ですが、ルートチョイスにおいては道を大いに利用する、チェックポイント、アタックの距離を短くするためのさえたオリエンテーリングができた。さすが、1走スペシャリスト金並さんの走りでした。しかもうしろに3チームもいます。本人も私達も安心、かつやらなくちゃと思えた事でしょう。

2走、WOCやWC等、海外の経験も多く、いつも大きなミスは犯さないで安心して待ってられる、予定どおりの走りをしてくれる金子さんです。そして毎回リレーでは順位を守るなり上げるなりと、まとめて、1走のねばりを引き継いで回ってきてくれるのを期待。タイム的にはややロスしたものと思われるが、20位の順位は保持。

3走、木植。ドイツと同じく金子さんよりタッチを受ける。6km上り280m、トップ42分予定のコース。倫也コーチより+20分の目標。スタートまもなく、4走のトップスウェーデンにあっという間に抜きさられる。ゆっくりのペース。少しづつのミスで前半を終える。ビジュアル前の隣接ポストパンチ後のスイス4走のサブリナと並走。なんだかむしゃらになってか負けん気が湧いたか、ここだけでも強さを出そうとしたのか、一生懸命走る。いつかのWCで3位になったサブリナ。3、4走は会場のまん中を中間レッグとして走るのです。そこを自分としては見事に力走して、間隔は保ったまま森の中へ入った・・・とたんへたって歩いてしまった私。

残すところあと3つのポスト直前で捻挫をしてしまい、しばらく歩いて時間をかけてしまった。ラスポから振り絞って走り、19位で4走福土さんにタッチ。トップの46分を含め、40分台4人、50分台6人、以下というように思いの他時間がかかっています。

6. 6km登り315mトップ47分予定のコース。走力、体力には誰にも勝る福土さ

んだから、ひざの痛みがでず、また焦りさえでなければ自分のいいペースでトントンと走ってくれるでしょう。暑さも増し、給水もたっぷりしているだろうかと思ってるそろそろの頃、笑顔さえ出す余裕の走りでビジュアルを通過していった。後半タフな山もジワジワとクリアし、大観衆の中、21位。トータルタイム4時間30分でゴール。

結果、21/25（うち3チーム失格）、21/22というところだろうか。22のスコバキアは30分も遅いので別格として、失格の3チームは途中まですぐ前後にいたので惜しかった。3分前にアメリカ・カナダ、20分前にウクライナ、30分前にデンマーク、ルーマニア。40分前になると3チームいる。又4人組めないベルギー、ブルガリア、イタリア、スロベニア、カザフスタン、ラトビア、リトアニア等、個人戦を参考にすると同じ位の力と思われる国に限ってエントリーしていないのが残念である。

下に何チームいようが、又上のチームとのタイム差がいずれも大きくてはよくない。その点今回はかなりの進歩が見えている。以前はオーストラリア・ニュージーランドは近い存在でした。今や4人とも決勝に残れる力をつけ、リレーでは6位、9位と見事です。リレーの下1/3のチームはすごく速い人が一人二人でやっています。日本はすでに力はほぼ同じになっています。次回のWOCこそ、一步抜け出して、まん中の仲間入りを果たしたいです。

男子リレー

丸山哲史

8月16日、世界選手権ももう今日が最終日である。天気は大会期間中もずっと快晴だったのに、朝から曇っていた。選手にとってはベストは条件である。

優勝候補は地元ノルウェー、ショートでの活躍が目だったフィンランド、全くさえていないスウェーデン、それにデンマークという北欧勢である。ディフェンディングチャンピオンのスイスは入賞できればよい方だろう。

我々日本チームの目標は18位。クラシックやショートの子選の結果から見て十分可能なものだ。そしてオーダーは、鹿島田-村越-加賀屋-丸山と、一見ひと昔前の「速い者順」であるが、実は違う。今回のリレーは、1、2走がロング、3、4走がショートとなっているためだ。

いよいよスタートだ。時刻は10時45分、天気もすっかり回復して、すでにかなり暑くなっている。スタートラインに並んだのは、35人。事前の情報によればコースパターンがたくさんあり、隣接ポストが近い場所では20mに置かれているということで、確実にオリエンテーリングをやらなければいけないらしい。

1走の間はFINがトップで通過していく。今回のリレーは全区間とも「中間」で一度会場に戻ってくるので、観客にも選手にも(?)楽しめるものとなっている。そして

カッシーもトップから約4分遅れで順調に通過、このまま走れば予定通りの順位でタッチできそう。下位の国が中間を通る前に、早くも1走のトップがタッチゾーンに入ってきた。FINのKarppinenだ。2位以下に5分の大差をつける素晴らしい走りである。と同時に多くの人々がこのままFINが逃げて優勝?とも考えた。

2走ではSWEのMrオリエンテーリングMartensson、UKRの星Omeltchenchoが同時にスタート、デットヒートとなりそう。カッシーは15分差の13位で村越にタッチ。ライバルの国々よりも速い、いい走りだ。また速くもイタリアがペナで失格になった。2走では予想通りSWEとUKRが素晴らしい走りでトップに立った。村越も終始安定した走りで順位を上げ、12位で3走の加賀屋にタッチ。目標より上の順位が狙えそう。4走にSWEがトップでタッチしたものの、ペナが発覚、優勝争いは、FINかDENに絞られた。4走の中間を上位の国が通過ししばらくして加賀屋が戻ってきた。ミスは数分あるものの、順位は15位で4走の丸山に期待をつないだ。

そして約15分後、1位で会場に戻ってきたのは93年のクラシカルチャンピオンのMorgensenで、悲願の初優勝をDENにもたらした。2位にはたったの16秒差でFIN、3位は地元NORがはいり、面目を保った。丸山は大きなミスを前半で犯してしまい、ペースをあげられぬまま順位を落とし、19位でゴール。目標には届かなかったものの、数カ国が失格となったため前回の順位は上回ることができた。また、今回日本チームに大きな可能性を見ることができ、次のスコットランドが非常に楽しみになった。

選手を世話するオフィシャルの立場から

田島利佳 (オフィシャル)

オフィシャルとしてWOCに参加することになった。チームのために何ができるかと考えてみると、雑用はもちろん、合宿などでコミュニケーションをとり選手(の状態)を知ること、トレーニングパートナーになること、マッサージをすること、そして現地に入って怪我をしたり、病気になった時を想定して、薬などを準備し知識をもって、対処することが挙げられる。

病気時などの薬は、ドーピング検査に引っかからないためのものを、日本オリンピック青少年総合センターの診療所(担当:本並女史)で用意していただいた。ここはオリンピック競技の日本チームはもちろん、日本体育協会に加盟しているスポーツ団体に対しても同じように薬を用意している(つまり我々は、彼等と同じ薬を飲んだりしていたわけだ!)。今回は個人的な面識で用意していただいたが、ドーピング検査用、ナショナルチームレベルの遠征ならば、開催地、人数(男女比)、大会時期などを言えば用意して下さるといふ。これからのために、フォーマットなどを用意して文書で送ったり、誰かが

行ってもいいようにしておくとういだろう。実際、検査対象になることはあまりなく、日本の大会でもドーピング検査なんてなく、なかなか目が届きにくいのが、準備することに越したことはない。ユニバーやJWOC、WC等でも必要と思われる。

次に怪我や故障をした時について。予防のテーピングテープやケアのための湿布&消炎剤などは選手自身で大体の準備はしてくるだろうと考え、たいした準備をしなかった。アイスパックやテーピングテープなどは現地でも買える。準備したのは、消炎剤、湿布、傷薬、包帯、ばんそうこ、虫さされ薬ぐらいなものか。しかし、タフなトレインだけあって、選手は思った以上に疲労がたまり、それをとるために湿布を使うことが多く、捻挫をして冷やすぐらいにしか考えていなかったために、不足しがちになってしまった。テーピングに関しても、アンダーラップやそのためのスプレーが足りないなどと選手からのリクエストがあったが、そのストックは用意していなかった。ここで助けていただいたのが、利光氏と羽鳥氏である。利光氏には湿布やテーピングテープを提供していただいた。羽鳥氏は、テーピング用品から始まり、アイシング用のパッケージ、バンテージ、消炎剤など、日本食までもも前もって用意して提供していただいた。わざわざ買いに行くことも、あわてることもなくすんだ。さらには選手へのマッサージも手伝って下さった。この場を借りてお礼を述べたい。

こちらの見積りが甘かったせいもあるが、選手個人のそれらの準備も荷物がかさばるし、限度もあってか、不足した物が多かった。日本食も含め、ある程度のものをひとまとめにして現地にも送ってしまってもよかっただろう。次への課題である。捻挫をした選手やケアのためのアイシングは、トレキャン中はホテルの氷をもらうことができ、WOC Week中はホテル内の冷蔵庫を利用して氷を作ることができたので、多いに助かった。

ここ最近周りの国を見ていると、多くの国で必ず1人はいい年をしたおぼさんのオフィシャルがいる。彼女らの行動を観察していると、チームの母という感じがしてならない。今回自分もそれを目指したが、何せ若気のいたり、まだまだ母にはとうていなりきれなかった。自分がやろうとしたことの半分もできなかった。反省しきりである。これからの日本チームがより良いコンディションでWOCに臨めるよう、ポテンシャルを発揮できるように期待し、何か力になればと考えている。

最後に。賛助し、応援していただいた方々によって、日本チームはいい状態でレースに臨めたと思う。男女とも昨年のノルウェーの世界カップの時からは考えられないほど結果を出したと思う。本当にどうもありがとうございました。1人1人頑張っただけで世界で闘うためには周りの応援は必須です。これからもどうぞ宜しくお願い致します。

1997年世界選手権 成績

(この成績は、WWWに公表されているものを電子的に取得したものであり、正式の成績表とは異なる点があるかもしれない。また一部文字化け・抜け等がある)。

クラシック予選(8月11日) 30位まで予選通過
男子予選A 男子予選B

1 Petter Thoresen	NOR	59.11	1 Timo Karppinen	FIN	57.13
2 Carsten Jorgensen	DEN	1:00.14	2 Jorgen Martensson	SWE	57.19
3 Janne Salmi	FIN	1:00.20	3 Allan Mogensen	DEN	57.35
4 Janis Ozolins	LAT	1:01.09	4 Chris Terkelsen	DEN	57.59
5 Johan Ivarsson	SWE	1:01.28	5 Daniel Giger	SUI	59.23
6 Tom Quayle	AUS	1:02.28	6 Edgaras Voveris	LTU	59.24
7 Yuri Omeltchenko	UKR	1:02.33	7 Carl Henrik Bjoseth	NOR	59.51
8 Bjornar Valstad	NOR	1:02.45	8 Arto Rautiainen	SWE	1:00.43
9 Steve Hale	GBR	1:02.53	9 Valentin Novikov	RUS	1:00.44
10 Tomas Prokes	CZE	1:03.09	10 Kjetil Bjoerlo	NOR	1:00.48
25 村越 真	JPN	1:08.22	30 Gabor Domonyik	HUN	1:08.17
30 Libor Zridkavesely	CZE	1:11.06	34 鹿島田 浩二	JPN	1:09.37
51 利光 良平	JPN	1:24.42	DISK加賀屋 博文	JPN	
出走70			出走69		

女子予選A 女子予選B

1 Anniina Paronen	FIN	42.08	1 Marlena Jansson	SWE	41.55
2 Reeta-Mari Kolkkala	FIN	42.09	2 Hanne Sandstad	NOR	42.44
3 Marie-Luce Romanens	SUI	43.31	3 Johanna Aski	FIN	42.48
4 Hanne Staff	NOR	43.36	4 Yvette Hague	GBR	43.22
5 Anette Granstedt	SWE	43.53	5 Sabrina Meister	SUI	43.47
6 Jana Cieslarov	CZE	44.44	6 Kirsi Tiira	FIN	43.55
7 Frauke Schmidt Gran	GER	45.18	7 Vroni Konig	SUI	44.26
8 Svetlana Gorlatenkova	RUS	46.26	8 Katarina Borg	SWE	44.28
9 Gunilla Svdrd	SWE	47.06	8 Heather Monro	GBR	44.28
10 Judith Keinath	GER	47.58	10 Elisabeth Ingvaldsen	NOR	45.40
30 Zsuzsa Fey	ROM	56.34	30 Verena Troi	ITA	53.35
43 木植 早生	JPN	1:07.06	45 金並 由香	JPN	1:07.30
DNF 金子 しのぶ	JPN		51 加納 尚子	JPN	1:38.34
出走53			出走53		

クラシック決勝(8月12日)

男子 13660 m	女子 8640 m				
1 Petter Thoresen	NOR	1:40.16	1 Hanne Staff	NOR	1:12.56
2 Jorgen Martensson	SWE	1:41.58	2 Katarina Borg	SWE	1:13.40
3 Kjetil Bjoerlo	NOR	1:43.04	3 Hanne Sandstad	NOR	1:14.34
4 Carsten Jorgensen	DEN	1:43.51	4 Kirsi Tiira	FIN	1:14.38
5 Tomas Prokes	CZE	1:45.01	5 Gunilla Svdrd	SWE	1:14.50
6 Janne Salmi	FIN	1:45.24	6 Anniina Paronen	FIN	1:16.35
7 Johan Ivarsson	SWE	1:45.53	7 Sabrina Meister	SUI	1:17.46
8 Mikael Bostr	FIN	1:46.35	8 Yvette Hague	GBR	1:18.17
9 Rudolf Ropek	CZE	1:46.41	9 Marie-Luce Romanens	SUI	1:18.37
10 Timo Karppinen	FIN	1:47.14	10 Vroni Konig	SUI	1:18.56
45 村越 真	JPN	2:09.02	出走59		
出走59					

ショート予選 (8月14日)

15位まで予選通過

男子予選 A

1	Bjornar Valstad	NOR	25.26
2	Juha Peltola	FIN	26.10
3	Alain Berger	SUI	26.39
4	Peter Jacobsson	SWE	27.10
5	Mikhael Mamleev	RUS	28.52
6	Thierry Gueorgiou	FRA	28.58
7	Allan Mogensen	DEN	29.14
8	Rolf Breckle	GER	29.21
9	Michele Tavernaro	ITA	29.32
9	Gabor Domonyik	HUN	29.32
11	Eirik Moe	USA	29.44
12	Svajunas Ambrazas	LTU	29.48
13	Warren Key	AUS	29.54
14	Armo Hiie	EST	30.11
15	Tomas Zakouril	CZE	30.34
15	Remigiusz Nowak	POL	30.34
17	鹿島田 浩二	JPN	30.48

出走35

男子予選 B

1	Timo Karppinen	FIN	24.42
2	Jimmy Birklin	SWE	25.06
3	Per Olaussen	NOR	25.35
4	Chris Terkelsen	DEN	25.55
5	Stephen Palmer	GBR	27.11
6	Rudolf Ropek	CZE	27.13
7	Christoph Plattner	SUI	27.32
8	Erik Aibast	EST	27.47
9	Edgaras Voveris	LTU	27.59
10	村越 真	JPN	29.16
11	Thomas Kreici	AUT	29.19
12	Falk H nel	GER	29.22
13	Valentin Novikov	RUS	29.54
14	Marian Davidik	SVK	30.00
15	James Scarborough	USA	30.04

出走35

男子予選 C

1	Mikael Bostr m	FIN	25.45
2	Kjetil Bjorlo	NOR	26.09
3	Jozef Pollak	SVK	27.21
4	Tarvo Avaste	EST	27.54
4	Steve Nicholson	GBR	27.54
6	Fereng Levai	HUN	27.55
7	Thomas Hjerrild	DEN	27.57
8	Dominic Humbel	SUI	28.00
9	Ovidik Mutiu	ROM	28.06
10	Sylvain Mougine	FRA	28.13
11	Pierpaolo Corona	ITA	28.50
12	Robert Walter	AUS	29.23
13	Yuri Omeltchenko	UKR	29.33
14	Jorgen Martensson	SWE	29.46
15	Wolfgang Waldh sl	AUT	29.50
23	丸山 哲史	JPN	34.04

出走32

男子予選 D

1	Janne Salmi	FIN	25.00
2	Johan Ivarsson	SWE	25.18
3	Steve Hale	GBR	26.53
4	Petter Thoresen	NOR	27.09
5	Jean-Daniel Giroux	FRA	27.18
6	Thomas Buhner	SUI	27.24
7	Alistair Landels	NZL	27.51
8	Janusz Porzyoz	POL	28.01
9	Carsten Jorgensen	DEN	28.53
10	Tilo Pompe	GER	30.33
11	Marcus Pinker	IRL	30.44
12	Grant Bluett	AUS	31.17
13	Cristiano Simoni	ITA	31.28
14	Vladimir Alexeev	RUS	31.35
15	Rene Ottesson	EST	31.54
18	利光 良平	JPN	33.33

出走33

女子予選 A

1	Johanna Askil	FIN	24.48
2	Katarina Borg	SWE	25.44
3	Torunn Fossl i S hre	NOR	26.35
4	Brigitte Wolf	SUI	26.42
5	Nicky Taws	AUS	27.19
6	Maret Vaher	EST	27.32
7	Heidrun Finke	GER	28.05
8	Eniko Fey	ROM	28.16
9	Maria Honzova	CZE	28.20
10	Julia Morozova	RUS	29.30
11	Merete Bigum	DEN	30.13
12	Bernadett Kovacs	HUN	30.18
13	Barbara Baczek	POL	30.31
14	Barbara Tobler	AUT	31.11
15	Heather Monro	GBR	31.39

女子予選 B

1	Yvette Hague	GBR	23.19
2	Hanne Sandstad	NOR	24.06
3	Kirsi Tiira	FIN	24.34
4	Irina Mikhalko	RUS	25.12
5	Gunilla Svdrd	SWE	25.50
6	Jana Cieslarova	CZE	26.23
7	Dorte Dahl	DEN	26.26
8	Anna Gornicka	POL	27.03
9	Maria Lubinszki	HUN	27.08
10	Tania Robinson	NZL	27.44
11	Vroni Konig	SUI	28.13
12	Anke Xylander	GER	29.07
13	Ruth Vaher	EST	29.33
14	Zsuzsa Fey	ROM	29.50
15	Uli Hartinger	AUT	30.04

24 福士 淑子 JPN 39.47 出走26
 26 金並 由香 JPN 55.47 出走27

女子予選C

1 Anna Bogren SWE 22.40
 2 Hanne Staff NOR 24.19
 3 Marie-Luce Romanens SUI 25.30
 4 Marcela Kubatkova CZE 25.49
 5 Danute Mansson LTU 26.30
 6 Karin Schmalfeld GER 26.42
 7 Tatiana Iaksanova RUS 27.36
 8 Elo Saue EST 28.05
 9 Natasha Rowe AUS 28.11
 10 Antonia Wood NZL 28.27
 11 Sandy Smith CAN 28.31
 12 Katja Honkala FIN 28.52
 13 Marianne Lynge Madse DEN 29.02
 14 Michalela Gigon AUT 32.04
 15 Verena Trol ITA 32.07
 21 木植 早生 JPN 36.22

出走26

女子予選D

1 Lucie Bohm AUT 24.01
 2 Sabrina Meister SUI 25.54
 3 Frauke Schmidt Gran GER 26.33
 4 Elisabeth Ingvaldsen NOR 26.38
 5 Cecilia Nilsson SWE 26.55
 6 Kulli Kaljus EST 27.02
 7 Pam James CAN 27.08
 8 Tine Rasmussen DEN 27.12
 9 Anniina Paronen FIN 27.21
 10 Kim Buckley GBR 27.28
 11 Olga Lepsikova CZE 28.15
 12 Juliette Soulard FRA 28.38
 13 Kristin Hall USA 28.41
 14 Jenni Adams NZL 28.44
 15 Nina Winnytska UKR 28.51
 21 金子 しのぶ JPN 39.39

出走26

ショート決勝 (8月14日)

男子

1 Janne Salmi FIN 26:05
 2 Timo Karppinen FIN 26:17
 3 Bjornar Valstad NOR 26:27
 4 Per Olaussen NOR 26:50
 5 Petter Thoresen NOR 27:14
 6 Mikael Bostr m FIN 27:18
 7 Jorgen Martensson SWE 28:12
 8 Juha Peltola FIN 28:14
 9 Johan Ivarsson SWE 28:19
 10 Kjetil Bjorlo NOR 28:21
 45 村越 真 JPN 34:32

出走60

女子

1 Lucie Bohm AUT 25:15
 2 Hanne Sandstad NOR 25:29
 3 Hanne Staff NOR 25:56
 3 Marie-Luce Romanens SUI 25:56
 5 Cecilia Nilsson SWE 26:11
 6 Johanna AskI FIN 26:32
 7 Yroni Konig SUI 26:57
 8 Brigitte Wolf SUI 27:11
 9 Kirsi Tiira FIN 27:17
 10 Anna Bogren SWE 27:27

出走57

リレー (8月16日)

男子 (1,2走:10.6km、3,4走:7.9km)

順位	国	名	レグ	合計	トップからの タイム
1	0007	Denmark	DEN		4:18.58
		Skovlyst, Torben	1:17.16	1:17.16-6	
		J gensen, Carsten	1:12.13	2:29.29-2	
		Terkelsen, Chris	55.51	3:25.20-2	
		Mogensen, Allan	53.38	4:18.58-1	
2	0002	Finland	FIN		4:19.14 00.16
		Karppinen, Timo	1:10.34	1:10.34-1	
		Peltola, Juha	1:19.24	2:29.58-3	
		Bostr ,Mikael	54.55	3:24.53-1	
		Salmi, Janne	54.21	4:19.14-2	

3	0004	Norway	NOR		4:24.27	05.29
		Tveite, H ard	1:22.55	1:22.55-9		
		Valstad, Bj nar	1:14.00	2:36.55-5		
		Bj lo, Kjetil	53.42	3:30.37-3		
		Thoresen, Petter	53.50	4:24.27-3		
4	0008	Russia	RUS		4:28.44	09.46
		Kozlov, Vladimir	1:25.16	1:25.16-15		
		Alexeev, Vladimir	1:13.14	2:38.30-6		
		Mamleev, Mikhael	57.25	3:35.55-4		
		Novikov, Valentin	52.49	4:28.44-4		
5	0001	Switzerland	SUI		4:36.16	17.18
		Humbel, Dominic	1:17.09	1:17.09-4		
		Berger, Alain	1:29.47	2:46.56-8		
		Plattner, Christoph	53.26	3:40.22-7		
		B rer, Thomas	55.54	4:36.16-5		
6	0006	Great Britain	GBR		4:41.35	22.37
		Musgrave, Jonathan	1:21.59	1:21.59-8		
		Stevenson, Jamie	1:25.11	2:47.10-9		
		Palmer, Stephen	56.32	3:43.42-8		
		Hale, Steve	57.53	4:41.35-6		
7	0019	Ukraine	UKR		4:48.47	29.49
		Mikhailov, Alexandre	1:15.01	1:15.01-2		
		Omeltchenko, Yuri	1:10.32	2:25.33-1		
		Slobodianiouk, Roman	1:14.06	3:39.39-6		
		Troukhan, Igor	1:09.08	4:48.47-7		
8	0014	Poland	POL		4:52.00	33.02
		Banach, Robert	1:16.26	1:16.26-3		
		Porzycz, Janusz	1:15.16	2:31.42-4		
		Moszkowicz, Pawel	1:07.39	3:39.21-5		
		Wozniak, Slawomir	1:12.39	4:52.00-8		
9	0005	Czech Republic	CZE		4:52.59	34.01
		Zridkavesely, Libor	1:22.55	1:22.55-9		
		Prokes, Tom s	1:25.58	2:48.53-10		
		Zakouril, Tomas	1:07.05	3:55.58-10		
		Ropek, Rudolf	57.01	4:52.59-9		
10	0011	Germany	GER		4:58.11	39.13
		Foeth, Oliver	1:25.11	1:25.11-14		
		Brekle, Rolf	1:24.32	2:49.43-11		
		H nel, Falk	1:07.24	3:57.07-11		
		Pompe, Tilo	1:01.04	4:58.11-10		
11	0013	Australia	AUS		4:59.15	40.17
		Key, Warren	1:27.39	1:27.39-18		
		Davis, Jock	1:27.24	2:55.03-15		
		Craig, Stephen	1:03.24	3:58.27-12		
		Bluett, Grant	1:00.48	4:59.15-11		
12	0010	France	FRA		5:04.10	45.12
		Vannier, Fabrice	1:28.43	1:28.43-20		
		Giroux, Jean-Daniel	1:26.49	2:55.32-17		
		Gueorgiou, Thierry	1:04.27	3:59.59-13		
		Mougin, Sylvain	1:04.11	5:04.10-12		
13	0020	New Zealand	NZL		5:09.46	50.48
		Landels, Alistair	1:22.56	1:22.56-11		
		Barbour, Greg	1:34.46	2:57.42-18		
		McLeod, Bruce	1:09.54	4:07.36-16		
		Ashmore, Darren	1:02.10	5:09.46-13		
14	0021	Slovakia	SVK		5:16.05	57.07
		Poll k, Jozef	1:22.56	1:22.56-11		
		Wallner, Jozef	1:23.45	2:46.41-7		

		Davidik, Marian	1:09.16	3:55.57-9		
		Chupek, Jozef	1:20.08	5:16.05-14		
15	0032	Canada	CAN		5:16.49	57.51
		Smith, Wil	1:17.21	1:17.21-7		
		Graham, Brian	1:35.17	2:52.38-13		
		May, Brian	1:19.03	4:11.41-17		
		Waddington, Mike	1:05.08	5:16.49-15		
16	0017	Estonia	EST		5:19.36	1:00.38
		Ottesson, Rene	1:27.03	1:27.03-16		
		Aibast, Erik	1:26.20	2:53.23-14		
		Avaste, Tarvo	1:07.08	4:00.31-14		
		Hiie, Armo	1:19.05	5:19.36-16		
17	0018	Austria	AUT		5:19.55	1:00.57
		Mohn, Christian	1:27.54	1:27.54-19		
		Kreici, Thomas	1:32.55	3:00.49-19		
		Helminger, Franz	1:15.51	4:16.40-18		
		Helminger, Norbert	1:03.15	5:19.55-17		
18	0016	Hungary	HUN		5:26.54	1:07.56
		Domonyik, Gabor	1:17.11	1:17.11-5		
		Denes, Zoltan	1:38.14	2:55.25-16		
		Levai, Ferenc	1:27.54	4:23.19-19		
		Viniczai, Ferenc	1:03.35	5:26.54-18		
19	Japan				5:3?.??	1:1?.??
		鹿島田 浩二	1:25.06	1:25.06-13		
		村越 真	1:24.38	2:49.44-12		
		加賀屋 博文	1:15.16	4:05.00-15/29		
		丸山 哲史	1:2?.??	5:3?.??-19/??		
DISK	0003	Sweden	SWE			
		Jacobsson, Peter	1:15.02			
		M lensson, J gen	1:10.30			
		Birklin, Jimmy	54.29			
		Ivarsson, Johan				
DISK	0009	Latvia	LAT			
		Grende, Ants	1:17.23			
		Zagars, Ivars	1:20.53			
		Vegeris, Girts	57.57			
		Ozolins, Janis				
DISK	0012	Lithuania	LTU			
		Ambrasas, Svajunas	1:16.20			
		Armalis, Vidas	1:25.43			
		Smilgius, Audrius	1:16.23			
		Voveris, Edgaras				
DISK	0015	Italy	ITA			
		Tavernaro, Michele	1:20.02			
		Simoni, Cristiano	1:26.44			
		Corona, Pierpaolo				
		Pradel, Roberto				

33ヶ国出走 19位以降データ未入手（日本のタイムは鹿島田選手提供による）

女子（1,2走:3.9km、3走:6.0km、4走:6.6km）

順位	国	名	レッグ	合計	トップからの タイム
1	0102	Sweden	SWE		2:51.41
		Bogren, Anna	34.00	34.00-1	

		Sv d, Gunilla	34.24	1:08.24-1		
		Nilsson, Cecilia	47.27	1:55.51-1		
		Jansson, Marlina	55.50	2:51.41-1		
2	0106	Norway	NOR		2:52.56	01.15
		S hre, Torunn Fossli	35.50	35.50-3		
		Ingvaldsen, Elisabeth	37.36	1:13.26-3		
		Sandstad, Hanne	46.42	2:00.08-2		
		Staff, Hanne	52.48	2:52.56-2		
3	0104	Switzerland	SUI		2:56.28	04.47
		Wolf, Brigitte	34.40	34.40-2		
		Romanens, Marie-Luce	36.56	1:11.36-2		
		K ig, Vroni	50.06	2:01.42-3		
		Meister, Sabrina	54.46	2:56.28-3		
4	0101	Finland	FIN		3:04.42	13.01
		Tiira, Kirsi	40.52	40.52-7		
		Paronen, Anniina	39.32	1:20.24-5		
		Kolkkala, Reeta-Mari	48.15	2:08.39-5		
		Askl , Johanna	56.03	3:04.42-4		
5	0108	Great Britain	GBR		3:06.31	14.50
		James, Jenny	35.54	35.54-4		
		Campbell, Liz	43.30	1:19.24-4		
		Hague, Yvette	49.04	2:08.28-4		
		Monro, Heather	58.03	3:06.31-5		
6	0112	Australia	AUS		3:18.41	27.00
		Viner, Emily	42.03	42.03-10		
		Bluett, Tracy	38.27	1:20.30-6		
		Young, Alix	55.06	2:15.36-7		
		Taws, Nicky	1:03.05	3:18.41-6		
7	0121	Estonia	EST		3:21.56	30.15
		Alev, Mall	40.57	40.57-8		
		Vaher, Ruth	40.17	1:21.14-7		
		Vaher, Maret	58.01	2:19.15-8		
		Kaljus, K li	1:02.41	3:21.56-7		
8	0109	Russia	RUS		3:21.57	30.16
		Morozova, Julia	39.31	39.31-5		
		Mikhalko, Irina	47.47	1:27.18-11		
		Iaksanova, Tatiana	54.43	2:22.01-10		
		Gorlatenkova, Svetlan	59.56	3:21.57-8		
9	0113	New Zealand	NZL		3:22.01	30.20
		Adams, Jenni	42.23	42.23-13		
		Ambler, Kirsten	39.31	1:21.54-8		
		Robinson, Tania	50.47	2:12.41-6		
		Wood, Antonia	1:09.20	3:22.01-9		
10	0103	Czech Republic	CZE		3:29.09	37.28
		Kub tkov , Marcela	48.19	48.19-18		
		Lepsikov , Olga	41.09	1:29.28-12		
		Honzov , Maria	1:01.59	2:31.27-12		
		Cieslarov , Jana	57.42	3:29.09-10		
11	0105	Germany	GER		3:34.24	42.43
		Keinath, Judith	39.34	39.34-6		
		Schmalfeld, Karin	43.20	1:22.54-9		
		Finke, Heidrun	57.46	2:20.40-9		
		Gran, Frauke Schmitt	1:13.44	3:34.24-11		
12	0111	France	FRA		3:43.58	52.17
		Leomant, Valerie	42.41	42.41-15		
		Perbet, Audrey	48.30	1:31.11-13		
		Soulard, Juliette	1:07.16	2:38.27-16		
		Coupat, Laure	1:05.31	3:43.58-12		
13	0114	Austria	AUT		3:50.56	59.15

		Hartinger, Uli	46.22	46.22-16		
		Gigon, Michalela	1:02.58	1:49.20-19		
		Tobler, Barbara	1:05.31	2:54.51-17		
		B m, Lucie	56.05	3:50.56-13		
14	0122	Poland	POL	3:52.38	1:00.57	
		Gornicka, Anna	41.48	41.48-9		
		Sobczynska, Joanna	53.42	1:35.30-18		
		Baczek, Barbara	1:01.48	2:37.18-13		
		Kozłowska, Ewa	1:15.20	3:52.38-14		
15	0107	Hungary	HUN	3:57.10	1:05.29	
		Kovacs, Bernadett	42.16	42.16-12		
		Lux, Andrea	49.56	1:32.12-14		
		Lubinski, Maria	1:05.35	2:37.47-15		
		Gardonyi, Reka	1:19.23	3:57.10-15		
16	0110	Denmark	DEN	4:00.57	1:09.16	
		Bigum, Merete	42.38	42.38-14		
		Lynge Madsen, Mariann	51.08	1:33.46-15		
		Rasmussen, Tine	1:03.52	2:37.38-14		
		Dahl, Dorte	1:23.19	4:00.57-16		
17	0123	Romania	ROM	4:01.50	1:10.09	
		Mirea, Veronica	42.12	42.12-11		
		Fey, Eniko	43.31	1:25.43-10		
		Fey, Zsuzsa	1:02.12	2:27.55-11		
		Duca, Luminita	1:33.55	4:01.50-17		
18	0125	Ukraine	UKR	4:09.11	1:17.30	
		Diatchenko, Lesia	48.41	48.41-19		
		Spasyuk, Mariya	45.40	1:34.21-16		
		Oufimtseva, Olga	1:20.49	2:55.10-18		
		Winnyska, Nina	1:14.01	4:09.11-18		
19	0115	United States	USA	4:27.04	1:35.23	
		Williams, Karen	59.02	59.02-22		
		Harrison, Kris	1:08.47	2:07.49-22		
		Dickison, Peggy	1:12.21	3:20.10-22		
		Hall, Kristin	1:06.54	4:27.04-19		
20	0119	Canada	CAN	4:27.43	1:36.02	
		Smith, Sandy	46.23	46.23-17		
		James, Pam	48.22	1:34.45-17		
		Mcneil, Philippa C.	1:33.15	3:08.00-20		
		Hagen, Catherine	1:19.43	4:27.43-20		
21	0118	Japan	JPN	4:30.29	1:38.48	
		Kinnami, Yuka	52.14	52.14-20		
		Kaneko, Shinobu	1:03.02	1:55.16-20		
		Kiue, Sanae	1:11.01	3:06.17-19		
		Fukushi, Yoshiko	1:24.12	4:30.29-21		
22	0124	Slovakia	SVK	4:58.34	2:06.53	
		Libantov, Kataro na	53.07	53.07-21		
		Durcov, Alena	1:14.20	2:07.27-21		

観戦者として世界選手権の記事を書いてくれと頼まれて、二つ返事で引き受けたのはいいが、物見遊山でちっともまじめに観戦していないから、まじめなことを書ける自信が無い。そこで、観戦記という主旨からははずれるとも思うが、今回の大会参加での一つの体験とその感想を書いてみたいと思う。

パブリックレースのゴールレーンのすぐ隣にもう一つのレーンがあったのを記憶しておられる方も多いと思う。勢い良くゴールレーンに駆け込んで来る一般の参加者のかたわらを、車椅子で、あるいは介護の人に付き添われて、またマウンテンバイクで、それぞれのペースでゴールしてくる人達があったことが印象に残っている。いわゆるTrail-0(トレイル-0)である。実は、私はこの世界選手権の前に参加したScottish 6 daysの大会で、世話になったイギリス人夫妻に誘われてこのトレイル-0を初めて体験した。日本ではこうしたOLはやっているかと聞かれて、やっていないと答えたら、じゃあぜひ帰ってからこれをお前の友達に見せろと言われ、持ち帰ったのが、掲載の地図とチェックカードである。この場を借りて紹介させていただきたいと思う(もちろん位置説明表もあったのだが、うっかりしてもらい損ねた)。

たまたまOrienteering Worldの8月号に紹介の記事が載っていたが、トレイル-0とは、道を主体としたポイントOLのコース上に、各番号ごとに2-5個の一群のコントロールフラッグが置かれており、コース上の定められた位置に立ち、正しいコントロール位置が記載された地図と位置説明とコンパスとを見ながら、それらの中から正しい位置に置かれてあるコントロールを選ぶ、というものである。それは、本来は障害者を対象とした車椅子使用の参加者のためのものようだが、そこでは障害者ばかりでなく、子供や一般の人達も当日のレースを走った後、グループで参加していた。フラッグは、例えばやぶ(植え込み)の北西角と南西角あるいは隣のやぶの角といったように置かれてあり、地図の見方はもちろん方角の見方、位置説明のシステムおよびそのIOF記号を的確に理解していないと正しく判断できない。それはまさに、OLの本質とはどういうものかを初心者理解させるのにも持ってこいなのではないかと思われた。日本の大会で個人のレースのおまけのように設けられたトリム-0、だいたい何となく道を行けばコントロールがあり、縮尺も個人の地図と同じ場合がほとんどであり(ここでは1:5000)、ましてや車椅子での参加など思いもよらない、と比べてのこの細かい配慮は、ヨーロッパでの長いOLの経験の積み重ねから出てきたものかと実感すると同時に、こうしたところに、ヨーロッパ勢の強さの源の一つを見たような気がした。また世界選手権の会場内のNOF(ノルウェーOL連盟)のテントで実に多くの種類のOL指導用の教材が並べられて売られていたのも印象的であった。

そう言えば今年はノルウェーで初めてOLの大会が開かれてからちょうど100年目にあたるそうで、会場内のIOFのテントでは100記念のグッズが売られていて、フットO、スキーO、トレイルO、そしてサイクルOの4つの図柄がレインボーカラーでデザインされたTシャツは、“VM97”のTシャツよりは、よほどしゃれているように見えた。

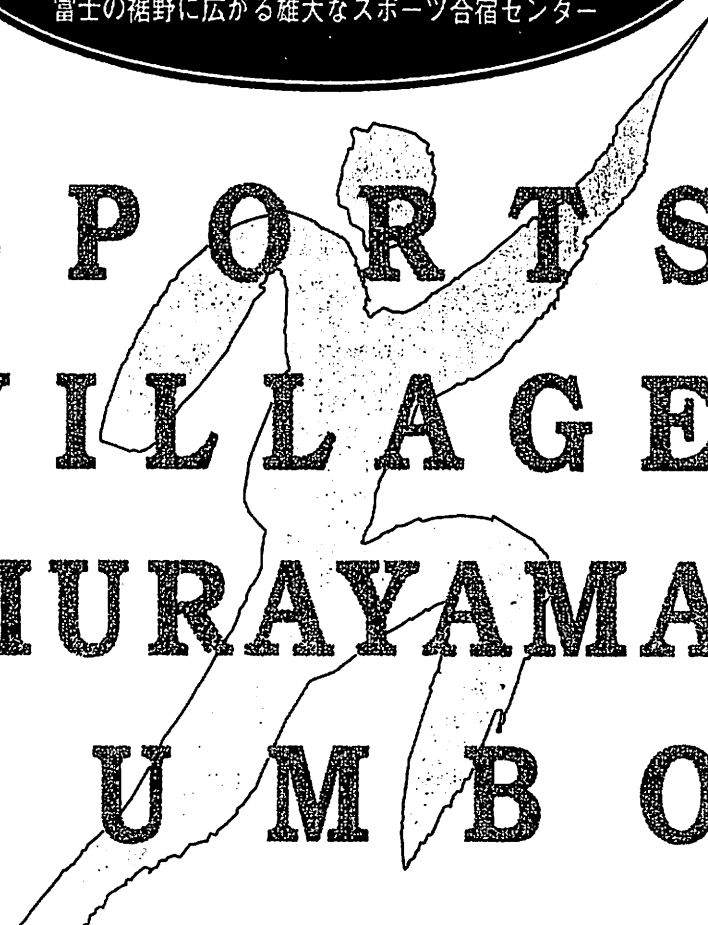
100年の歴史の重みは、たかだか30年の歴史しか持たない我々にとっては依然として大きな壁である。が、老練さが滲み出ているJörgen Mårtenssonといい、短く刈り込んだ精悍な面構えのPetter Thoresenといい、何かを真摯に追及している人は皆とてもいい顔をしている。もちろん日本選手の面々も、である！

(紙面の都合で、図は割愛させて頂きました)

スポーツ・ビレッジ

村山ジャンボ

富士の裾野に広がる雄大なスポーツ合宿センター



S P O R T S
V I L L A G E
M U R A Y A M A
J U M B O

スポーツ・ビレッジ

村山ジャンボ

〒418 静岡県富士宮市元村山1071-2

TEL: (0544) 27-8438
27-1215

〈夜間〉 26-4438

FAX: (0544) 26-4438

第17回オリエンテーリング世界選手権報告書

発行 WOC SQUAD JAPAN

発行人：宮川 達哉

編集：村越 真

事務局：稲葉英雄

4 4 4 岡崎市美合町字小豆坂20-1

ユートピア小豆坂211

0564-55-5602
